九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

こどもの生活体験学習の現代的構成に関する研究

猪山, 勝利
長崎大学教育学部

https://doi.org/10.15017/8998

出版情報：生活体験学習研究. 1, pp.3-8, 2001-01-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　創刊号　3－8（2001）

こどもの生活体験学習の現代的構成に関する研究

猪　山　勝　利

A Study on Modern Composition of Life Experience for Childhood

Iyama　Katsutoshi

要約　生活体験の現代的構成を明らかにしていく基本視角として、現代的生活創造性、こどもの生活主体性、創造的実働性、個・協同的関係性、こどもの生活構造を提起した。その視角から、生活体験の現代的構成として、身体性、食生活性、住生活性、ファッション性、仕事性、生活言語性、文化性、人間･社会関係性、情報･バーチャル性、生活行事性等10の生活体験領域を析出した。

キーワード　現代的生活創造性、生活主体性、創造的実働性、個・協同関係性、生活体験構成

1．問題の所在

本稿の目的は、生活体験学習の内容研究の基本的視角を明らかにする基礎作業として、生活体験の現代的構成に関する試論を提起することにある。

近年、こどもの生活体験の弱体化や希薄化の進展により、「学習の基底」の弱体化ばかりか、こどもの「生きる力」の低下が指摘されはじめている。それにともない、こどもの体験を活性化、再生しようとする論議が活発になりつつある。その動向を端的に示す政策動向として、『生きる力』の育成を主柱とした第15期中央審議会答申（1996年）やこどもの体験重視を提唱した生涯学習審議会答申『生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはくぐむ』(1999年)がある。特に、後者の生涯学習審議会答申はこどもの体験を本格的に提唱した答申であり、こどもの体験学習を促進する大きな動因として作用しつつある。しかし、答申の基本課題が道徳観・正義感を主体とする「心の成長」に基調を設定していることにもより、こどもに何であれ体験させれば良いと言う体験至上主義や体験拡散状況を生みだしていることは否めない。さらに、現在のこどもの体験の希薄化や弱体化状況下においてはやむを得ないとはいえ、成人主導型の体験学習が先行し、こどもに体験を「させる」動向さえ生みつつあり、せっかく体験をしても体験がこどもの発達に内在化しない体験状況さえ生じている。

このような状況が進展する現在、教育界をはじめ、こどもの発達にかかわる関係者はこどもの体験を提唱するだけでなく、改めてこどもの発達における現代的体験の意義やこどもの総合的発達と体験との関係や体験の総合的構造を明らかにすることが求められている。

上記の問題意識を踏まえて、本稿は改めてこどもにとつての体験の位置付けを問うとともに、生活体験の現代的構成に関する試論を提起したいと考える。

2．こどもと「生活体験」把握の基本視角

(1)　現代的「生活（文化）創造」性

これからのこどもの生活体験を考えていく基底課題として、現代的「生活」概念の再検討が必要である。

その理由として、第１に、近年、生活体験学習の基盤であり、対象である「生活の在り方」と「生活者」

連絡・別刷請求先（Corresponding author）
長崎大学教育学部（〒852-8521 長崎市文教町1-14）
Faculty of Education, NAGASAKI UNIVERSITY（Bunkyo-machi 1-14　Nagasaki City, Japan）

が再検討を迫られつつあり、生活体験学習にとつては、その体験学習の内実である「生活」の現代的変化に対応する必要があるからである。

第２に、生活体験学習は基礎的生活力など「既存の生活の体験学習」だけではなく、こどもの将来にかかわる「生活を創造する体験学習」として形成、創造していくことが求められると考えるからである。

近代社会《中期》に入り、都市化社会主導の社会構造の進展とその生活的実体である商品主体「消費社会」の進展により、職住分離の郊外社会の生活が端的に示しているように、生活は「商品消費生活」化してきた。商品生産を主体とした「生産主導社会」においては、生活は商品（モノ）の消費ととらえる動向が進展し、生活体験そのものが消費生活体験に矮小化されて理解されてきた。この消費生活主体の生活は、モノの消費を生活水準の基本とし、生活者を個人的にも、社会的にも受動的な非主体化的位置付けにし、生活学習をせいぜい「賢い消費者学習」に矮小化しがちである。「豊かなモノ消費社会」において、人々は一定の消費文化の選択的享受の拡充は進展しているが、実体的には社会主体者としては無力化し、「孤人」化して、家族や地域など生活共同体を弱体化させ、種々の社会問題を生起させている。

しかし、近代社会《後期》に入った近年、生活を「消費」ではなく「生活文化創造活動」ととらえる動向が生起している。その動向を踏まえて、経済学や家政学を中心に新たな生活研究が台頭し、生活概念の現代的形成が図られつつある。二宮厚美、成瀬龍夫、天野正子、吉野正治らは、「生活は消費に限定されるものではなく、人間の生命活動の総体である[1]」（二宮厚美、1985．成瀬龍夫、1988．天野正子、1996．吉野正治、1980.）と把握する積極的生活概念を提起している。すなわち、生活は生命性、発達性や文化的創造性を内包した『生活様式』であり、生活者は受動的消費者でなく、主体的生活文化創造者であるととらえる生活者概念を提起している。さらに、生活の消費化によって、生活の個人化、孤立化が進展し、地域生活はいうに及ばず家族生活さえミーイズムの進展によりバラバラ・パサパサ化しつつある現状を批判的に再検討する動向が生起している。すなわち、伝統的個人埋没ではなく生活者の個性を基底とした上で、新しい「協同化」が進展しつつあり、「協同」家族づくりや地域「協同」ネットワークの創造、さらに生活重視の公共性の形成を創出しはじめている点も指摘されている[2]。

この点にかかわって、今後生活体験学習研究は、体験学習の内容をなす『生活』そのものを他の諸科学と共同して、総合的に研究することが必要であり、かつ生活体験学習論は現代生活論研究の重要な構成分野を構成すると思われる。

(2)　こどもの生活主体性

1999年の生涯学習審議会答申も、こどもが生活体験をする際に企画段階からこどもが自主的に参画することを提唱し、「こどもたちが自分たちで考え、自らかかわることができるような取り組み」の重要性を強調している。この点、従来のこどもの生活体験を親や地域住民が企画し、展開するこどもの被主体性から一歩前進する視点を提起している点は評価できる。しかし、その視点は「将来の」生活者性を形成するための学習体験の視点であり、「現在の」生活主体者性を形成する視点とは言えない。この視点の根底には、近代的こども観として、こどもを社会的な被保護者として把握するこども観がある。

現在、世界的に1990年代に入って、こどもを被保護者とするこども観を超えて、こども も人間的、社会的主体性をもつ存在であるととらえ、こどもの権利性を形成する動向が進展している。こどもの生活体験を把握する際にも、そのようなこども観を根底に定位することを基本とすることが重要である。このこども観を根底にすれば、こども も社会的な主体性をもつ存在であり、「こども も家庭・地域の生活主体者」であるととらえることが基本となる。とくに、人間的、社会的な自立期にある少年期において、その視点から生活体験を位置付けていくことが重要であり、少年期に生活主体者として生活体験を学習し、生活者として生活役割をはたす主体性を形成することが重要である。

(3)　創造的実働性

現在、近代的学習論の再検討が進展しているが、再検討の基本視点のひとつは学習観の転換がある。つまり、従来の学習観の学習と実践・実働とを切り離して位置付ける論の再検討であり、学習は実践・実働と連関して展開されることによりその実効性を高めるとともに、創造的学習を形成できるという新たな視点で

ある（Rolin, L. 1994）。ローリンは、『学習者は実働者であることによつて真の学習者となる[3]』ととらえる積極的視点を提起している。言うまでもないが、この視点は、実践や実働と乖離した学習観を批判しているだけでなく、実働や実践さえすれば学習が生成するという、素朴「経験主義教育論」をも批判している。近年、日本においても佐藤学氏らによつて、デューイやヴィゴッキーの再評価をふまえて、『学習は文化実践である[4]』（佐藤学、1995．1999）ととらえる新たな学習観が提起されている。佐藤氏らは、学習における実践性を重視し、学習を実践と乖離してとらえる学習観を超克しているとは言え、学校学習を中心としているために、学習者を実践者であるととらえる視点にまではいたってないと言えよう。これからの生活体験学習は、学習と実践、実働性を内在的連関において把握し、学習者は実働者であると積極的に把握していく視角が重要である。

さらに、その視角の発展として、生活体験学習を既存の生活を体験する学習であるととらえる既知学習観を転換することが求められる。すなわち、生活体験学習は既存の生活体験を学ぶとともに生活の創造への学習、現代的には生活文化創造学習ととらえることが重要である。その視角と上記した(2)の視角を総合化すれば、こどもたちが「協同」型家族づくりや「協同」地域コミュニティづくりの主体者として参画していく活動や実践を形成していくことが課題となる。家族や地域が弱体化しつつある現代、こどもたちが家族や地域の創造に参画することは可能であるし、こどもたちが参画することによつて新たな家族づくりや地域づくりが活性化するのである。こどもの生活体験学習を家族や地域が支援するだけでなく、家族や地域の人々とともに家族や地域を活性化し、創造する生活体験学習を拓いていくことが求められている。

(4)　個・協同的関係性

1999年の生涯学習審議会は、道徳心や社会性の形成にはたす生活体験を強調しているが、道徳心や社会性の内実自体の内容についての検討がなされてはいない。しかし、基本的には、歴史通底の基本内容を主体としており、その具体的内容については国際性を加味するくらいで、時代的には伝統的な「村落共同体」次元の道徳心や社会性と「消費社会」的道徳心や社会性をミックスした生活体験内容に止まる視点であり、生活体験の現代的創造を提起しているとはと言えない。すなわち、「生活体験・自然体験はこどもの“心”をはぐくむ」が、そのためには、当の心の内実をなす道徳心や社会性の内実そのものの現代的再検討をする必要である。というのも、道徳心や社会性の骨格である「人間関係性、社会関係性」の内実が、現在大きな転換を迎えているからである。すなわち、主体的《個性》の台頭であり、従来の共同体を基底とする集団主義的人間関係や社会関係において、「自己主張をせず他にあわせること＝リーダーや上司に従うこと」という関係性が崩壊し、個の主体性が社会関係における主導性をもちつつある。したがって、従来の観点から「我がまま」ととらえられがちであった生活における「個人的主張や個人的生き方スタイル」を肯定することが前提となる。そのことを前提とした上で、他方では、現代の「孤人埋没」のミーイズムや「自己責任」論を超克し、「個性を生かした協同性」を創出していくことを現代的視角として定立していくことが重要であり、現代の生活体験学習は《個性・協同性》の人間関係性や社会関係性を創造する視角を設定することが求められる。

(5)　こどもの現代的生活構造

生活体験学習の内容構成を考える基本的視点として、こどもの生活構造を把握する現代的視点を考えておく必要がある。

その１は、生活体験内容の現代性である。近代中期までの古典的な身体直結性中心の生活性を生活体験の基本構成としてとらえる視点の超克である。現代においても、生活体験の基礎を身体直結性の生活体験とする意義は大きい。しかし、最低生活維持を水準としていた生活水準に回帰する生活体験ではなく、これからの生活体験学習は文化性や情報性を内包した現代的生活内容をも組み込んだ重層構造として把握することが基本となる。

その２は、『こども』の現代的生活性という視点である。この点にかかわって、現在「こどもの生活構造」自体の再検討が求められている。近代社会の「こどもの発見」以来、こどもの発達段階性を重視して「こどもの独自生活性」が提唱されてきた。その結果、成人と対比して未成熟なこどもは、能力・人格の学習と遊びを骨格とした発達課題性が設定されている。しかし、

実体は現代能力・学歴社会に規定され、能力形成の内「学校能力」すなわち学力が主導的核となり、他の諸能力や人格形成、遊び領域は低位置に置かれてきた。その結果、今日では道徳性や社会性にかかわる人格形成の欠落や遊びの弱体化が強調され、その欠落を補完する道徳強化論や遊び復活論が提唱されている。

しかし、今日のこどもの発達性を考えると、この近代発達性論を超克することが求められていると思われる。すなわち、能力・人格形成や遊びとともに、生活力、自然対応力の形成を定立する必要がある。現代的「こどもの生活構造」は、こどもの自然対応力、遊びと生活力が基底となり、その基礎の上に能力・人格形成を設定する4構造を形成する必要があると考える。そのように、こどもの生活をとらえた上で、こどもの生活構造要素間の関係を深化していく必要がある。すなわち、自然対応力と遊びや生活力との新たな関係の形成、遊びと学習の新たな関係性の形成、生活力と学習の関係性の形成などの再検討であり、さらに遊びと生活力の新たな再編成問題である[5]。本稿では、詳細な検討はできないが、特に遊びと生活力の新たな再編成については、現代のこどもの遊び内容論の再検討とともに早急に検討されなければならない研究課題となっている。

その3は、こどもの「生活組織」を家族に特化するのではなく、友人・生活集団、学校生活集団、さらに「地域協同コミュニティ」として拡充し、重層構造化する視角も重要である。

3．こどもの生活体験の現代的構成

(1)　生活体験内容研究の先行研究

こどもの生活体験の内容構造に関しては、定説が形成されているとは言えないが、意欲的な研究を展開している須藤敏昭（1991.）、南里悦史（1999.）らの研究がある。

須藤敏昭の研究は、遊びを主体として仕事、労働のこどもの発達における意義を強調し、現代的生活体験論の先行研究として継承すべき重要な視点を提起している[6]。

南里悦史の研究は、現代的生活体験論としては最も本格的な研究であり 特に生活体験と学習の関係性については本格的な研究を展開している[7]。南里悦史は、こどもの現代的生活体験の重要な視点として、①基本的生活習慣の確立、②基本的生活能力の獲得、③家庭・地域での関係性の確保、④世代間、地域間、異文化間交流などの伝統・文化や異文化接触、⑤生きる力と生活意欲の育成をあげている。

こどもの発達にとって生活体験の重要性が喧伝される今日、須藤敏昭、南里悦史の先行研究を学び、継承し、さらに本格的な現代的生活体験内容論を形成することがこれからの課題となっている。小稿も、先行研究を受けた生活体験内容論についての、一つの試論であり、今後生活体験学習学会会員や関係諸科学との共同調査研究を展開して、本格的な研究をすすめていきたい。特に、人間的自立期の現代的少年期の発達における生活体験の意義と展開構造の研究は焦眉の課題となつている。

(2)　生活体験内容の基本構成

こども一般ではなく、ここでは特に少年期の生活体験について考えるが、本来生活体験が展開される人間・社会空間としての家庭、友人、学校、地域・社会、自然空間別に生活体験構成を提起すべきであるが、小稿では主として家庭、地域を前提に考察していくこととしたい。こどもの体験として、前記したように、基本的に自然体験、遊び体験、生活体験、学習体験の4領域から構成されているが、生活体験を主体として考察する立場からは、他の3領域の体験は「生活体験連関体験」として位置付けていくこととする。

①　生理・身体性

こどものからだについては、1978年以来5年毎に調査している日本体育大学体育研究（正木健雄）室の「こどものからだ調査」が、その最新の「2000」報告を発表した。その調査によれば、「アレルギー性疾患を持つ子」と」と「『すぐ疲れた』という子」の増大を指摘している。そのようなこどもの増大の要因として、自然・戸外遊びの弱体化、夜型生活主体の生活リズムのくずれ、テレビ視聴、テレビゲームの増大、正座・拭き掃除など身体的生活の弱体化、家事参加の低落をあげている[8]。食生活とともに、生活参加力が基本的な生理・身体性を形成していく力となることを改めて重要視していくことが求められている。さらに、こどもの生理・体力だけでなく、寝起きや生活リズムなど基本生活時間管理の崩れがこどもの身体問題を生起させており、

体力問題とともに現代的身体形成の重要な課題である。

②　食生活性

こどもの食生活は、食物、料理・片付け、食事、排泄などから構成される生活力の基本であり、現代的食生活はその各領域で種々の問題を生起している[9]。食物の片寄りや外食問題、料理・片付けへの参加の弱体化、共同食事時間の低下、不定期な排泄など、子どもが主体的に食生活に参加していない状況が進展している。その結果、女子大生のコンビニや外食依存を増大するなど、青年期や成人期においても、問題のある食生活行動を生起させており、生活力や健康維持力の低下を招いている。子どもの食生活の立て直しは生活体験の重要な現代的課題である。

③　衣服などファッション性

衣服などファッションについては、現代のこどもは個性表現や美的感覚の高まりなど評価できる側面を高めている反面、重要な伝統文化性の継承の弱体化や過度の流行依存性の側面がみられる。この長所と問題性をふまえて、個性に合わせた新たな現代的衣服などファッションの形成体験学習を推進することも現代的課題である。

④　住生活性

こどもの住環境の問題性として、個室引きこもり問題が現代的問題となりつつある。こども部屋を孤立性におくのではなく、家族の協同空間との交流性をつくる空間として暮らす住生活対応を形成することが重要である。住環境整備の仕事、園芸や家庭菜園、家庭文化用具づくりなどの協同住生活参加についても、こどもも生活主体者としての役割を果たす学習・活動が必要である。なお、こどもの居場所空間をこども部屋主体にとらえるのではなく、家族協同空間、友人とのたまり場、地域のこどもの居場所空間づくりへ拡充していく主体的かかわりの体験も現代的課題である。

⑤　仕事性

②～④とも連関するが、いわゆる「手伝い」を超えた家族内の仕事や家業、地域社会づくりの仕事や地域産業体験など、こどもの仕事参画体験についても現代のこどもの生活課題として、積極的に創出していくことが求められている。さらに、こども主体のフリーマーケットづくりやこども菜園・農場体験、生活産品づくりなども現代的課題である。

⑥　生活言語性

生活言語とは、方言を含む生活範域で使用される言語である。現代のこどもは生活交流関係の希薄化により、標準言語やマスコミ流行語主体の言語使用の頻度が高いと言われる。しかし、言語教育関係者も指摘するように、こどもの家族や地域などの生活内の対人・対物対応の生活言語の弱体化が標準言語の習得をも弱体化させており、主体的な言語力の弱体化が進んでいる。このことが、家族、友人、地域住民とのコミュニケーションや対話・討論力を弱体化させている。したがって、方言を含む生活言語を再生させていくことは、現代のこどもの言語習得にとつても重要な課題であり、生活体験学習を推進する基底の課題となっている。

⑦　文化性

現代のこどもは、情報性とともに文化性の生活力は高まっている。しかし、その文化内容はマスコミ文化や海外文化が主導しており、家族文化や地域文化など身近な生活文化力は逆に低下しつつある。この点において、伝統的な家族文化や地域文化を現代的に再生したり、活性化するとともに、現代的に創造することやこどもの家族文化や地域文化への参画を促進していくことは現代的生活体験として重要な課題である。特に、地域のこども文化の創造は、こどもの社会交流性を高め、社会創造への参画性を促進する重要な生活体験である。

⑧　人間・社会関係性

家族関係や地域関係の希薄化が基本要因となり、現代のこどもはこどもにとつて最も基礎的な友人関係を形成することも弱体化している。人間関係づくりの基礎は、家族生活や家族の人間関係を通した交流、コミュニケーション、支え合いによって形成されるものであり、とりわけ協同生活を基盤とした人間交流が重要である。さらに、友人との協同の遊びや生活体験を通した人間関係づくりや地域の多世代や多様な住民との交流も人間関係を形成していく上で重要である。なお、地域社会などの社会活動に参画していくことも、対人関係を豊かにするだけでなく、社会性を形成する点でも重要であり、こどもの地域社会への生活参画は現代のこどもに不可欠な課題である。こどもの人間関係や社会関係性の形成は、こどもの自愛感情や自尊心を形成することでもあり、対他的にも、対自的にも人間関

係づくりや社会関係づくりは、現代のこどもの生活体験として最も重視していくことが求められている。

⑨　情報・バーチャル性

現代のこどもは、情報リテラシィや映像対応性などのバーチャル性は現代の成人と対比しても、進んだ力を形成しつつある。しかし、その情報性やバーチャル性は実体験や実生活と対応して形成されなければリアリティと結合せず、マスコミなど外部情報やバーチャル文化に依存して、主体的な情報力やバーチャル性駆使力は形成されにくい。それどころか、情報依存症やバーチャル依存症が生起し、自己コントロール性を弱体させることさえ生じさせる。したがつて、生活情報性の習得やバーチャル性を生活体験と連関する生活体験の創出も、現代のこどもの生活体験として重視すべき課題である。

⑩　生活行事・イベント

年中行事や祭りなどの生活行事や諸種の生活イベントは、人々の生活を総合的に総括したり、再創造する結節点となる生活の構成要素である。従来家族生活や地域生活の重要な生活課題であった生活行事や生活イベントは、現在主体的な生活行事やイベントとして展開する比重は弱体化し、外部の商業ペースの生活行事やイベントとして展開される比重を増している[10]。その理由は、家族や地域の人間・社会関係の希薄化にも起因しているが、伝統的な生活行事や祭りなどが現代的生活感覚にマッチしない点にも理由がある。しかし、その重要性を考えると、伝統的な生活行事や祭りなどを現代的に再構成して、生活体験の重要な内容としてとらえることが求められていると言える。

《注》

⑴　二宮厚美『生活と地域をつくりかえる』労働旬法社　1985年
成瀬龍夫『生活様式の経済理論』御茶の水書房　1988年
天野正子『「生活者」とはだれか』中央公論新書1323　1996年
吉野正治『生活様式の理論』光生館　1980年
⑵　二宮厚美　同上書
⑶　L. Rohlin『Strategic Leadership in the Learning Society』 1994．AB・SWEDEN
⑷　佐藤学他『学びへの誘い』学びと文化１　東京大学出版会　1995年
佐藤学『学びの快楽』世織書房　1999年
⑸　須藤敏昭『現代っ子の遊びと生活』青木書店　1991年
⑹　須藤敏昭　同上書
⑺　南里悦史『子どもの生活体験と学・社連携』光生館　1999年
⑻　正木健雄『子どもの体力』大月書店　1979年
⑼　高増雅子「食生活からみた現代の子ども」宮崎礼子編『現代の家庭と生活経営』浅倉書店　1999年
⑽　井上忠司『現代家庭の年中行事』講談社現代新書1182　1993年